

名所解説

1 菩提寺山

金津集落の南東を縁取るようにならっている標高248mの丘陵地。9世紀初め空海(弘法大師)が新津惠日寺から村松の水戸野を経由しての帰途、この山に差し掛かり、真言密教普及のために一寺を建立し、菩提寺と名付け弟子の空法上人を歿したといふ。時代は下つて平安期、源平の戦いの折敗れて越後に逃れていた平惟茂を追つて、側室のお菊の方がこの山に差し掛かった。そこで平惟茂の死を知られ、香爐を手向けて了地が花立といふ、菊の方の在所を天下一説といふことから五島に抜ける山道は生活道路でもあり、公路とも呼ばれ「馬頭観音」が安置されている。



菩提寺山山頂付近の「馬頭観音」

2 白玉の滝

かつては岳修行地で、13世紀初頭から知られていたといふ。上流には落差15mの雄滝、下流には落差7mの雌滝がある。毎年7月初旬に地元の人たちで滝開きを行い、滝打たれの行事を行っている。周囲の静寂を打ち破るかのように絶えることなく滝を続けるのは滝は、夏でも肌寒さを感じさせる涼涼の地として人気がある。また厳冬期の2月には民間の有志による滝行も行われている。



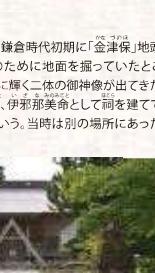
3 金津城跡

鎌倉時代初期に「金津保」地頭の金津小二郎貢義が築いたと言われている。「金津城跡」の碑が建っている地は標高180mほどの「黒巣立」と呼ばれている台地上にあり、古くから「殿上」とも呼ばれていた所である。



4 堀出神社

金津城跡山にあるように、鎌倉時代初期に「金津保」地頭金津小二郎貢義が築いたために地面を掘っていたところ、「黒い土」とともに金色に輝く二体の御神像が出てきたといふ。これを伊那那岐命、伊那那美命として祠を建てて祀ったのが堀出神社だといふ。当時は別の場所にあったらしい。



5 基坪

「金津城跡」「堀出神社」の項と同じく、金津小二郎貢義の城工事の際に地下から御神像と「黒い水」が出てきたといふ。これが原油であり原油が湧き出した元という意味でこの名がある。開基坪の碑は、昭和33(1958)年に帝国石油㈱によって建てられたものである。



6 原油を含む地層

付近に原油を含む地層は何箇所があるが、もっともはっきり分れる地層。路頭の砂岩層に原油が認められ、近くと原油の匂いがする。この原油を含む層を「オイルサンド」といふ。この地層は新津丘陵北部に見られる。「金津層」と呼んでいる。



7 石油の世界館

かつて隆盛を極めた石油産業歴史を物語る各種資料、上級掘り模型、金津油田の歴史などの展示物が陳列されている。無料で開放している。



8 ブルホイルと3号井

中野邸美術館のすぐ前にある、ブルホイルといふのは、原油をくみ上げるポンプに巻いてある皮を張り替える時に使う、重いビットポンを巻き上げる装置。



9 ポンピングパワー

各油井に接続されているシャッカルライオン(張り綱)に往復運動を伝える装置で、金津油田では16台のポンピングパワーで140箇所のポンプを動かしているといふ。菩提寺山登山道の途中から少しこみこみのボンピングパワー(写真は明治42(1909)年にアメリカから導入された「ナショナルポンピングパワー1号機」という)。



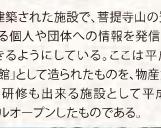
10 C38号井

菩提寺登山道を登るとすぐ見える石油戸井。「銅式機械鉄」といふくみで、明治42(1909)年にこれを使って213m掘り下げたといふ。現在は手回しのハンドルをつけて、これを回すとピストンが上下して原油汲み出しのくみがわかる体験装置となっている。



11 里山ビジャーセンター

石油の里のアリバに建築された施設で、菩提寺山の登山者や里山を利活用する個人や団体への情報を発信したり、準備や休息もできるようになっている。ここは平成元(1989)年に「観光物産館」として造られたもので、物産だけではなく上記の他に研修も出来る施設として平成27(2015)年にリニューアルオープンしたものである。



12 古津八幡山遺跡

昭和16(1931)年の磐越自動車道の土とり計画が浮上した折に、確認調査が実施されて発掘された。弥生時代の集落跡と推定される遺跡である。標高約50mの丘陵上に構築されおり、周囲には環濠が張り巡らされていることから高地性環濠集落と呼ばれている。これまでの発掘調査で50基の竪穴住居が確認されている。平成17(2005)年に国の史跡に指定された。現在、7棟の竪穴住居が復元され、方形周溝型、前方後方周溝墓も復元されている。

13 史跡古津八幡山弥生の丘展示館

八幡山古墳の裏のアリバに建築された施設で、菩提寺山の登山者や里山を利活用する個人や団体への情報を発信したり、準備や休息もできるようになっている。ここは平成元(1989)年に「観光物産館」として造られたもので、物産だけではなく上記の他に研修も出来る施設として平成27(2015)年にリニューアルオープンしたものである。



14 中野邸美術館

「日本の石油王」と呼ばれた故中野貴一翁の邸宅及び庭園を有料公開している。中野邸内部の美術館には、中野貴一翁及びその子忠太郎所蔵の古書や骨董類が陳列されている。また庭園は2000本の薔薇が植えられていて、春の新緑はもちろん、とりわけ秋の燃えるような紅葉は見ものである。



15 青木の墓(高岩寺)

金津の高岩寺(高岩寺)の裏の墓地にある「青木の墓」は、古くから怪談じみた話として伝わっている。しかしこれは青木右衛門という実在した人の墓であり、この兵右衛門は江戸時代、赤沢組(現在の白根近辺)16才の村の庄屋であった。この16才のほんのびは、彼が新發田藩から許可を得て新田として開発した村々であった。兵右衛門は熱心に開拓開墾に努める反面、人々の命を買うような行為もしばしば見られ、また不正を働くなどして新發田藩により所払いを受けたといふ。この墓に刀傷が残っていることから、怪談じみた話(仕立てられたのであろうが、それはまた人の命を買った結果であることを意味している)といふ。



16 新潟県埋蔵文化財センター

県立の施設で、八幡山山麓に建かれているが、特に八幡山遺跡の発掘物が陳列されているといふことはなく、県内各地の発掘の成果が集められている。毎年行われている各地の発掘の報告書はここで入手できる。



17 酒井憲次郎の碑(広大寺)

古津広大寺境内に一際高くそびえる碑が酒井憲次郎の碑である。酒井憲次郎は明治36(1903)年生まれ、陸軍軍械飛行場の訓練生となり、1等飛行操縦士の資格を取得した。その後北海道の小樽飛行場に就職し、この時に千歳空港のもととなる千歳飛行場に赴き、平成14(2002)年に千歳空港広場にブロンズ像が建立されている。その後朝日新聞社に移り、昭和7(1932)年満州国の大典式の取材をした帰途、日本海・沖縄を30歳の生涯を終えた。鳥取県の八幡山城山に殉難碑が建てられている。広大寺の碑は昭和8(1933)年、母トミによって建立されたもので、碑陰の文に憲次郎の略歴が記されている。



18 古津八幡山古墳

平成23(2011)年へ平成25(2013)年の3年間にわたる史跡整備のための確認調査により、大きな円墳が築かれていたことが確認された。この円墳は直径60mもあり、県内最大級の古墳であることも確定した。平成23(2011)年に八幡山遺跡に統ての国の史跡として追加指定されている。この古墳を築いた人は、八幡山の集落を放棄したのち、低地に移住した人達の子孫ではないかと推定され、その新しい集落が「舟戸遺跡」ではないかといわれている。



19 本多家雙芳碑

朝日の本多家は元は尾張藩の藩士であったといふ。江戸後期の天保年間に本多元元、号を英賀と改めた人が医学を学び、同時に実験室という私塾を開いて多くの子弟に学問を教えた。その子一哥、号を敬齊と言ったが、この人も医学を学び父とともに医業に従事した。明治元(1868)年、医学者を育成するため「仁寿館」を開いたが、翌年出生する水原の病で倒れ、そのまま早世した。さらにはその翠が医業もなり、実験室も仁寿館も閉鎖された。この二人の臣巨(雙芳)を失った子弟の中野貴一や川田忠治らが本多家の邸内にこの碑を建てた。



20 舟戸遺跡

これは新津丘陵西端の旧大通川の自然堤防上に立地する古は古墳時代の集落跡であることが確認されている。昭和20年代の耕地整理の際に発見され、平成5(1993)年の第二次調査以来20回を超える調査が行われている。この遺跡は、八幡山に古墳を築いた人々の集落跡と考えられ、豊穴住居や杭坑、大量的土器が発見されている。平成27(2015)年、第25次となる調査が行われ、約40基の遺構と弥生土器が発掘された。



21 お戸の地蔵

西島集落のやや東側にある小さな池にまつわる話である。この池には龍の印のあるお地蔵様が祀られている。その昔、日照り続いで村人たちが困っていたが、梅雨時になても雨が降らず、このままでは田畠の作物が枯れそうになった。村人たちがこのお地蔵さまに一心に雨乞いのお祈りをする。すると3日後に雨が降って、田畠の作物も助かったということである。それ以來この池は大切に守られているが、伝説や民衆の話と想われるが、実際に特定できる場所として残っている不思議な池である。



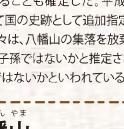
22 程島館跡

「新津城」(現新津自動車学校の地にあったといわれている)や「東島城」と一体のものとして建設され、おそらく東島城の控えの居館として建てられたものと推定されている。平成16(2004)年に旧新津市が発行した「新津の文化財」には、「辺境ほほ10mに及び、壁に漆と土塗を巡らせ」とあるが、現在は田地の小さな公園の一角に標柱が建正在しているのみである。



23 山居稻荷

もともと「島の妙蓮寺」の境内に八幡宮とともに安置されていた稻荷神社が、明治の神仏分離政策によって分離移設された。当時妙蓮寺の総代を務めていた西島の佐藤家がその所有地である以後、代々佐藤家がこの祠を管理し、毎年春秋2回の祭礼を行っている。なお、昭和8(1933)年に当時の金津尋常高等小学校発刊の「郷土趣味読本」に「おさんぎわね」の話が載っている。この中に「おさん」という名の狐が記した祠が建てられたといふ節があるが、これとの関係は不明である。さらにこの祠のある場所は東島の区域で「山居」と言われているが、朝日側では「山姥」と呼んでいる。



24 桜清水

鎌倉時代の弘安元(1278)年、中村という村で神社を建てるために壁土用の土を削り取っていたところ、きれいな清水が湧き出たという。村人たちはこれを「櫻清水」と呼んで大事にしていたが、近くに大きな桜の木があったところから、いつの間にか「桜清水」と呼ばれるようになった。また一部には、妙蓮寺の開祖である日上人が発見したともいわれているが、眞偽は不明である。今でもこの水を汲みに来る人が後を絶たない。



鎌倉時代の弘安元(1278)年、中村という村で神社を建てるために壁土用の土を削り取っていたところ、きれいな清水が湧き出たという。村人たちはこれを「櫻清水」と呼んで大事にしていたが、近くに大きな桜の木があったところから、いつの間にか「桜清水」と呼ばれるようになった。また一部には、妙蓮寺の開祖である日上人が発見したともいわれているが、眞偽は不明である。今でもこの水を汲みに来る人が後を絶たない。

25 旧中島小学校跡

金津地域に初めて建築された本格的な小学校がこの中島の小学校であった。明治15(1882)年の学制の施行によりあえず西島の蓬徳寺で最初の学校が開校した。その後明治11(1878)年に建設され、当時津島小学校の本校として田家から鎌倉新田までの広大な学区を抱えた学校であつた。その後程島と中村が津島村から合併し、新たに「金津村」が誕生した。明治41(1908)年中島村は中島小学校となつた。さらに明治34(1901)年中島村は津島村と合併し、新たに「金津村」が誕生した。明治43(1910)年、中島小学校は閉鎖され、金津尋常高等小学校に統合された。石段を登った所にある煉瓦の赤門は当時のままである。



26 程島館跡

「新津城」(現新津自動車学校の地にあったといわれている)や「東島城」と一体のものとして建設され、おそらく東島城の控えの居館として建てられたものと推定されている。平成16(2004)年に旧新津市が発行した「新津の文化財」には、「辺境ほほ10mに及び、壁に漆と土塗を巡らせ」とあるが、現在は田地の小さな公園の一角に標柱が建正在しているのみである。



27 山居稻荷

もともと「島の妙蓮寺」の境内に八幡宮とともに安置されていた稻荷神社が、明治の神仏分離政策によって分離移設された。当時妙蓮寺の総代を務めていた西島の佐藤家がその所有地である以後、代々佐藤家がこの祠を管理し、毎年春秋2回の祭礼を行っている。なお、昭和8(1933)年に当時の金津尋常高等小学校発刊の「郷土趣味読本」に「おさんぎわね」の話が載っている。この中に「おさん」という名の狐が記した祠が建てられたといふ節があるが、これとの関係は不明である。さらにこの祠のある場所は東島の区域で「山居」と言われているが、朝日側では「山姥」と呼んでいる。

